2011年度　活動報告(4月～6月)　Activity Report

■講演会・ワークショップ等■

●5月16日　比較日本文化部門・国際連携推進部門共催　講演会
「宮澤賢治の作品にみられるキリスト教的表象」
プラットゥ・アブラハム・ジョージ氏（ジャワハルラル・ネルー大学）

■海外大学・研究機関調査■

●6月8日～14日　中国（北京大学、北京外国語大学、南開大学）
望月圭子〈国際日本語教育部門〉

■プロジェクト■

●長沼直兄の日本語教育関係資料の電子化、データベース化に向けた作業を開始しました〈社会言語部門〉なお、このプロジェクトの遂行のために、宮本隆史さん（日本学術振興会特別研究員）を特任研究員に任命いたしました。

■会議歴■

●センター会議：2011年4月14日、5月13日、6月16日
●部門会議：2011年4月11日、12日、13日、5月9日、23日、30日、6月6日

■ Symposiums and Lectures ■

●*16 May.: Lecture - "Representation of Christianity in Miyazawa Kenji's Literary Works"* by Prof. Pullattu Abraham GEORGE(Jawaharlal Nehru University, India)

■ Firsthand Examination of Overseas Universities and Research Institutions ■

●*8-14 Jun. China (Peking University, Beijing Foreign Studies University, Nankai University)* Keiko Mochizuki

■ Project ■

●*Starting digitalization of the database of Naganuma Naoe collection, by Sociolinguistics Division*
In regard of this project, Takashi Miyamoto, research fellow of Japan Society for the Promotion of Science, was appointed as a research fellow of ICJS.

■ Meetings ■

●*Center meetings*: 2011 – 14 Apr., 13 May, 16 Jun.
●*Division meetings*: 2011 – 11, 12 and 13 Apr., 9, 23 and 30 May, 6 Jun.

■今後の活動予定■

国際日本語教育部門主催
言語研究と教育シリーズ第一回研究会
『『省略』日仏対照研究と教育への応用』
発表者：金谷武洋（モントリオール大学）、秋廣尚恵（プロバンス大学）
日　時：2011年7月19日（火）18:00 ～ 19:45
会　場：東京外国語大学留学生日本語教育センター「さくらホール」

■ Future Event ■

[Language Studies and Education] The 1st Research Seminar:
Comparative Analysis o n "Ellipsis" in Japanese and French hosted by the International Japanese Education Division, International Center for Japanese Studies
Lecturers: Takehiro Kanaya, University of Montréal
Hisae Akihiro, University of Provence
Date: Tuesday, 19 July 2011, 18:00-19:45
Venue: Sakura Hall, TUFS Fuchu campus

ジャーナル『日本語・日本学研究』論文公募のお知らせ
Call for papers "Journal for Japanese Studies"

・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文（20ページ程度、400字×60枚）、海外の研究動向・研究潮流の紹介（20ページ程度）、研究ノート（10ページ程度）、書評（1ページ）
・原稿の書式：寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には、英語の概要（300語程度）、英語論文には日本語の概要（800字程度）をつける。
・投稿エントリーとエントリー締め切り：論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、下記編集委員会アドレスにE メールで投稿予定の旨を連絡すること。メール本文 には、氏名・論文の題名（仮題でもよい）・所属機関名（該当者のみ）、および連絡先（住所・電話番号・メールアドレス）を明記すること。また、メールのSubject（件名）には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。
・公開、複製、公衆送信に関する権利：掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

【指定期日】投稿希望連絡締め切り　2011年 7月15日必着
投稿論文締め切り　2011年 9月 末日必着
【連絡先】　東京外国語大学　国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒183-8534　東京都府中市朝日町3-11-1
電話/ FAX：042-330-5794　E-mail：info-icjs@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

Submission Requirements of the Journal
Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education（double space, approx. 20 pages,）international research trends（approx.20 pages,）research report（approx. 10 pages,）book review（ 1 page.）
Format: The articles may be written in Japanese or nglish. For articles in Japanese, attach a summary in English（approx. 300 words,）and for articles in English, attach a summary in Japanese（approx. 800 letters.）
Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

【Deadlines】Deadline for Journal entry is July 15th, 2011 Deadline for Submission is September 30th, 2011
【For further information, please contact 】
International Japan Studies Editorial Committee, International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies
【Address】
3-11-1, Asahi-cho　Fuchu-shi, Tokyo　183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81（0）42-330-5794
E-mail : info-icjs@tufs.ac.jp
URL: http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

発行　東京外国語大学国際日本研究センター　〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F
TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

国際日本研究センター NEWS LETTER ニューズレター
International Center for Japanese Studies

No. 05
2011.06

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

・講演会「宮澤賢治の作品にみられるキリスト教的表象」開催　"Representation of Christianity in Miyazawa Kenji's Literary Works" Report …… P1
・留学生に聞きました―東京外国語大学の授業と生活　Interview with International Students: Life and Course Study in TUFS …… P2
・小特集　留学生が体験した東日本大震災　Special Future: How International Students Experienced the Higashi-Nihon Great Earthquake ／座談会Round-table discussion …… P3
・スウェーデンから戻って　Returning from Sweden …… P4
・2011年度各部門方針　2011 Divisions Policies …… P5 ～ 6
・交流協定校紹介⑤　The Chinese University of Hong Kong …… P7
・今おもしろい本③　Series: Interesting Books I Recently Read …… P7
・活動報告および『日本語・日本学研究』論文公募のお知らせ　Activity Report and Call for paper of International Japanese Studies …… P8

講演会「宮澤賢治の作品にみられるキリスト教的表象」開催
"Representation of Christianity in Miyazawa Kenji's Literary Works" Report

2011年5月16日に比較日本文化部門・国際連携推進部門の共催で、プラットゥ・アブラハム・ジョージ氏（ジャワハルラル・ネルー大学）の講演会「宮澤賢治の作品にみられるキリスト教的表象」が開催された（本部棟中会議室）。コメンテーターは柴田勝二氏、中野敏男氏（いずれも本学教員）。70名を超える参加者で盛況であった。講演者であるジョージ氏は現在、国際日本文化研究センターの共同研究者として、国際的な宮澤賢治研究をリードされている。

ジョージ氏は、宮澤賢治の作品の中におけるキリスト教関係の言葉、モチーフそして思想を丹念に拾い上げつつ、法華経信仰者であった賢治がなぜキリスト教という異宗教の要素を自分の作品の中に盛り込んだのかと問いかけた。そして、賢治の周辺にいたキリスト教関係者の存在、日本女子大学に入学しキリスト教に接していた妹・とし子の影響とその死などの転機を押さえつつ、聖書の黙示録から得たヒント、自分の作品おける普遍性と救済の思想を深めようとした意図などを展開した。

ジョージ氏の講演に対して、柴田氏は、法華経との関係からみた、賢治におけるキリスト教の影響の相対化、賢治における「本当の神」の意味などを、作品例を通して問題提起した。中野氏はジョージ氏の講演に示唆されたとしつつも、戦前日本の大東亜共栄圏構想における思想的前提のひとつとなった国柱会が賢治に占めた意味と、関東大震災と今日の東日本大震災とを参照し、関東大震災前後の賢治作品にみられる変化から、「震災から戦争へ」という時代的思潮を読みとる必要があるのではないかと提起した。

賢治のアイデンティティをどこにみるか、また、賢治がめざした宗教的思想的な普遍性と、賢治がコミットしていた時代状況とのどちらを重視するかという問題は、宮澤賢治研究が常に伴う争点であろう。ただし、そうした賢治研究の蓄積を消化しつつ、賢治作品がもつ宗教的普遍性という志向性をキリスト教的表象から論じたジョージ氏の講演は斬新であるだけでなく、賢治研究により広い国際思想的な視野が必要であることを実感させた。国際的な文脈に立った日本研究の意義を再確認する講演会であった。　（友常勉）

The above lecture by Professor Pullattu Abraham GEORGE, (Jawaharlal Nehru University, India) was jointly hosted by the Comparative Japanese Culture Division and International Cooperation Division on May 16 2011. Facilitated by Shoji Shibata, Toshio Nakano, (TUFS professors) as discussants, it was a lively lecture attended by more than 70 people.
Professor George questioned why Miyazawa, who was a Nichiren Buddhist, chose to include elements of another religion in his works. He went on to review the major turning points in Miyazawa's life, such as the presence of Christians around him, and explained how he was inspired by the Book of Revelation to deepen the concepts of universalism and salvation in his works. In response, Prof. Shibata and Prof. Nakano pointed out the issues of where to look for Miyazawa's identity, and whether to focus on the religious universalism he aspired to or the contemporary situations he was committed to. Prof. George's lecture was interesting in that he showed originality of ideas by discussing religious universalism in Miyazawa's works from the representation of Christianity.

(Tsutomu Tomotsune)

留学生に聞きました―東京外国語大学の授業と生活
Interview with International Students: Life and Course Study in TUFS

東京外国語大学の留学生に、留学の目的、外語大と母国の大学の違い、先生たちと日本人の学生たちとのコミュニケーション、印象に残った授業、大学への要望などを聞いた。　（聞き手：友常勉）

■ウェイン・ウァイ・ティン・チャン

ニューヨーク州立大学オルバニー校、イースト・エイジアン・スタディーズ

日本に留学したのは、新しい人生を経験したかったからです。専攻は東アジア研究なので、日本はどんな国なのかを見たかったし、日本語の勉強もしたかったのです。それで、大学の教授の勧めで、言語学が専門の外語大を選びました。選択が間違っていないと思っています。外語大は学習の環境が整っていて、先生たちも親切に助けてくれます。授業も楽しかったです。色々な国の人々と一緒に勉強できて、特に「異文化コミュニケーション」の授業に参加できたことはとてもいい経験でした。外語大の評価制度はアメリカの大学に比べて、それほど厳しくありません。アメリカではより多くの課題とテストをこなさなければならず、とても忙しいです。先生たちとのコミュニケーションはあまり問題がありませんが、日本人の学生たちは比較的にシャイだと思います。でも、彼らに積極的に話しかけたら、最初のうち恥ずかしがってしゃべらないかもしれませんが、段々話していくと、自信が付いてきて、留学生と同じぐらい話すようになります。外語大の生活には大変満足していますが、例えば英語話者からいえば、英語でコミュニケーションできる環境がもっと広がってくれると快適かもしれません。

■ヴィクトリア・ヤコブレワ

サンクトペテルブルグ大学、日本史

日本に留学した理由は日本語を上達し、日本文化を学ぶためでした。そして、外語大を選んだ理由は日本語を勉強するにはもっとも良い大学だからです。外語大の授業はロシアの大学とまったく違います。ロシアの大学では、勉強したい科目を選択できないのです。すべての科目が必修で、スポーツ、数学、コンピューター、哲学、物理も勉強しなければなりません。それに比べて、外語大は自由です。勉強したい科目だけを選べばいいですから、勉強は楽しいです。ロシアだったら、嫌いな科目も勉強しなければならないので、学んだ知識をすぐ忘れてしまいます。外語大の授業では世界中の人々の意見が聞けるので、それによって、自国中心的な考え方を脱却できて、とても面白かったです。また、ロシアと違って、ここでは個人の意見が尊重されることはとてもいいことだと思います。日本人の学生たちはシャイですが、他人の意見を良く聞くと思います。外語大に関して本当に満足しています。

■ユリヤ・スラスチェノワ

サンクトペテルブルグ大学、日本史

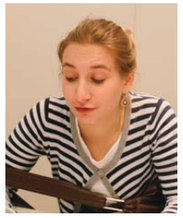
日本語を練習したいがために、日本にやってきました。大学の選択はあまりおおくありませんでしたが、外語大には満足しています。言語学の大学としてはもっとも良い大学だからです。外語大とロシアの大学の違いの一つは、ロシアの大学では、エッセイを書くことやプレゼンテーションがないことです。それはあまりよくないと思います。なぜならば、プレゼンをするとき、自分についてたくさん学ぶことができると思うからです。また、授業では必ずディスカッションが行われることもロシアの大学と違います。授業は日本のほうがやさしかったですが、面白かったです。授業中、先生は時折留学生の国の事象について質問するので、先生からだけではなく、ほかの国の学生からも学ぶことができます。また、先生たちも、勉強の問題以外も、気軽に相談に乗ってくれて、手伝ってくれます。留学生の名前も一所懸命覚えました。これはロシアの大学では考えられないことです。外語大はリゾート大学のような場所です。すべてに対して満足していますが、科目の選択がより充実していれば、さらに満足できたと思います。将来、奨学金をもらって、研究生としてまた日本に留学したいと考えています。

The participants who participated in this interview were asked their opinions on the following questions: why they came to Japan, difference between studying at TUFS and studying at their home school, communication with professors and students, request to TUFS and the Japanese Government.　(Interviewed by Tsutomu Tomotsune)

■*Wien Wai Ting Chung,*
State University of New York at Albany, Major: East Asian Studies

Being an East Asian Studies student, Wier came to Japan because he wanted to experience a new type of life and see what Japan was like. His professors recommended TUFS to him because it is a language-specific university and it has a lot of resources and teachers that can help him improve his Japanese. Overall, classes were fun as there were many opportunities to learn from people from other countries, and he didn't face much problems communicating with his professors and the Japanese students. He thinks Japanese students are initially shy but once they become more confident, they talk as much as the foreign students.

■*Victoria Yakovleva,*
Saint-Petersburg State University, Major: History of Japan



Victoria came to Japan to improve her Japanese and to study Japanese culture. She chose TUFS because it was the best university for studying languages. Classes were interesting in TUFS because of the wonderful opportunities to learn from people from other countries and hearing different points of view on an issue, and being able to choose the subjects she wanted to study, unlike in Russia where all subjects are compulsory. She likes that a lot of attention is paid to individual thinking, too. She believes Japanese students are open to other points of view and communication between foreign students and Japanese students brings benefits to both.

■*Yuliya Slastenova,*
Saint-Petersburg State University, Major: History of Japan

Yuliya's purpose was to practice Japanese when she came to Japan. She thinks TUFS is like a resort university because she can choose the subjects she wants to study, say her own opinions in discussions with her classmates in class, interact with people from other countries, and have control over what she is learning. She also likes the fact that the professors would listen to the student's problem, even if it was not about their studies, and tried to help him or her out. Teacher's ability to remember foreign students' names the first time they met also impressed her, unlike Russian teachers who don't remember Russian names at all. She would have preferred more subject choices to choose from but basically she is very satisfied with everything.

小特集　留学生が体験した東日本大震災
Special Future: How International Students Experienced the Higashi-Nihon Great Earthquake

3月11日の東日本大震災と原発事故を東京外国語大学の留学生たちはどう受け止めただろうか。留学生たちの座談会とスウェーデンからの留学生・アクセル・テオリンさんからの寄稿で小特集を組んだ。

In this number, in order to focus that how international students of TUFS experienced Higashi-Nihon Great Earthquake,we organized round-table discussion with international students and asked to write an article to Axel Theorin.

東日本大震災、津波、原発事故―留学生座談会　*Round-table discussion – the Higashi-Nihon Great Earthquake, Tsunami and Fukushima Nuclear plant accident*

参加者

スープリア・シン（ネルー大学、日本語日本文化、インド）
ズラティナ・トシェヴァ（ソフィア大学、日本語日本文化、ブルガリア）
ヤロシュ・イジー（カレル大学、日本学、チェコ）
イロダ・ソジコワ（東洋学大学、日本語・日本文化、ウズベキスタン）
レンカ・ビレチャロバ（上智大学、グローバル社会論、チェコ）

Supriya Singh（Jawaharlal Nehru University, Japan Japanese Language and Japanese Culture, India）
Zlatina Tosheva（Bulgaria, Sophia University, Japanese Language and Japanese Culture, Bulgaria）
Jaroš Jiří（Charles University in Prague, Japanology, the Czech Republic）
Iroda Sodikova（Toyo Gakuen University, Japanese and Japanese Culture, Uzbekistan）
Lenka Vyletalova（Sophia University, Global Society, the Czech Republic）

Q.3月11日の地震のときにはどこにいましたか。

スープリア：東京都内の会社にいました。インドの家族は心配して電話をくれたのですが、最初はつながらなかった。インドのお祖父ちゃんは心配で泣いていました。それで3月6日にインドに帰って、4月2日に日本に戻りました。親が心配していたし、私もこわかったから。

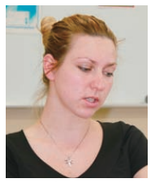
ズラティナ：私は留学生の旅行で大阪を経由して宮崎県に移動するところでした。私は1986年生まれ。ブルガリアではチェルノブイリの世代と呼ばれています。だから地震や津波は怖くないけれど、放射線のことは怖かった。でも私は日本に来るのが夢だったし、帰国してからまた来られるかどうかわからないから、帰国するつもりはありませんでした。国の両親は、私を信頼しているから、残りたいならそうしなさいといってくれたので、ほっとしました。

【スープリアさん】

ヤロシュ：3月11日、ぼくは寮にいました。あまり怖くはなかったですが、原発事故は怖かったです。東京は安全だと思いました。両親には帰って来いといわれましたが、事態はそれほど悪化していないと感じたから、残るとメールしました。

イロダ：両親から早く帰って来いといわれました。私は放射能については知識がなかったし、帰国して両親を安心させて、先週、日本にもどりました。ウズベキスタンではずっとロシアのニュースが放送されるのですが、悪いニュースばかり。

レンカ：地震が起きた時、私はまだチェコにいました。日系企業に勤めていました。この留学をずっと楽しみにしていましたから、二週間ほど予定を遅らせて日本に来ました。


【ズラティナさん】

Q.地震後、二ヶ月経ってから、日本社会の印象はどうですか。

ズラティナ：不思議に早く普通の状態にもどりましたね。

スープリア：私はパニックになったけど、それは地震のあと店に何もなくなって、びっくりしたから。

レンカ：外国人の目からみると、私たちの国よりずっと前向きだと思う。

イロダ：3月18日に帰国するために関西空港にいったとき、みんなが自分の知っていることを私たちに教えようとしてくれた。それから、被災者を支援しようという学生たちがいた。

スープリア：お店やチケットカウンターで、いつもどおりに日常的な業務を遂行してくれる人たちがいて本当に感謝しています。

Q.この経験がそれぞれの研究やプロジェクトに与えた影響は。

レンカ：私の研究テーマは人間の移動や企業の移動なので、この地震が企業の移動や労働市場にどのような影響を与えるかを考えることができると

Q: Where were you during the earthquake on Mar 11th?

【本学の災害情報支援サイト http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/tufs_disaster_information/】

Supriya: I was at my office in Tokyo. My family in India was worried and tried calling me, but they couldn't get through initially. My grandfather was so worried he cried. I went back to India on Mar 16th and returned to Japan on Apr 2nd. My parents were worried and I was also scared.

Zlatina: I was on the tour for foreign students en route to Miyazaki Prefecture via Osaka. I was born in 1986 and am called the Chernobyl Generation in Bulgaria. So, while I am not afraid of earthquakes or tsunami, I am afraid of radiation. But it was my dream to come to Japan, and I didn't know if I could return to Japan if I went home. So I decided not to leave. I was glad my parents trusted me and allowed me to stay here.

Jaroš: I was in the dormitory that day. I was not so frightened but the nuclear accident was scary. I thought Tokyo was safe. My parents wanted me to go home, but I emailed them to say that I was staying put because I felt that the situation didn't deteriorate.

Iroda: My parents told me to come home immediately. I knew little about radiation and in order not to worry my parents, I went home. I came back last week. In Uzbekistan, we got only bad news from Russia.

Lenka: I was still in the Czech Republic when the earthquake happened, working at a Japanese company. As I had been looking forward to studying in Japan, I came here two weeks later than scheduled.

Q: Two months after the earthquake, what is your impression of the Japanese society?

Zlatina: Things returned to normal extraordinarily fast.

Supriya: I panicked because I found that there was nothing in the stores after the earthquake.

Lenka: As a foreigner, I think Japan sees the situation more positively than our countries.

Iroda: When I was at the Kansai Airport waiting to go home on Mar 18th, people were telling us about everything they knew. There were also students who were helping the evacuees.

Supriya: I felt thankful that the people working in stores and ticket counters carried out their daily activities as per normal.

Q: What effects does this experience have on your own research or project?

【ヤロシュさん】

Lenka: My research theme is the migration of people and corporations, so I could think about how this earthquake is affecting the migration of corporations and the labor market.

Zlatina: My research theme is the "Japanese outlook on life

思っています。

【イロダさん】

ズラティナ：私の研究テーマは「日本人の死生観」。地震後の状況とどう結びつくかわかりませんが、私が前に考えていた「死生観」と変わってくるのではないか。

スープリア：私のテーマはCM。とくに「CMの社会的役割」なので、ACジャパンのCMはいいポイントになると思う。

イロダ：私は言語学なので地震との関係はありません。でも今までの自分を振り返って、時間を無駄にしてきたことがわかった。だからこれからは時間を大事に使いたいと思う。

ヤロシュ：私は「ニート」がテーマ。どう地震の問題を私のテーマにとりこめるかわからないけれど。

Q.**今日はどうもありがとうございました。**　（聞き手／友常勉）

and death." I am not sure how this is related to the post-earthquake situation, but I think my idea should change.

Supriya: My research theme is commercials, in particular, the "Social role of CM." I think the AC commercials are good points to consider.

Iroda: My research theme is linguistics so it is not affected by the earthquake. But I realized I have wasted time so far in my life. Therefore, I want to make good use of time from now on.

【レンカさん】

Jaroš: My research theme is "Neet" but I am not sure how to include the earthquake in my research.

Q: Thank you very much for today.

Tsutomu Tomotsune
(Questioner)

〈寄稿〉スウェーデンから戻って　*Returning from Sweden: Axel Theorin*

アクセル・テオリン
（大学院総合国際研究科言語応用専攻日本語育学専修コース２年）

3月11日の夜、ずっとテレビを見たり、インターネットでニュースの更新を探したりした。3月13日、出身国であるスウェーデンに帰って日本語教育実習をする予定だった。13日には問題なくコペンハーゲンそしてスウェーデンのマルメまで行けた。久しぶりに帰ってきた喜びが日本から逃げた良心の痛みを上回った。しかし、自分の体の安全を確保できていても、精神的には震災から離れられていなかったことに、すぐ気付いた。ぜったい揺れないスウェーデンでも、最初の一週間は揺れているように感じた。絶対に福島第一原発の放射能物質の流出に影響されないスウェーデンでも、ニュースはそれについてのコメントで溢れていた。東京電力と日本政府とが充分に情報を提供しなかったことは外国にいたからこそ痛感した。現場からの確かな情報がない状況で、スウェーデンのメディアは、アメリカやフランスの報道局の報道を再放送し、資格が怪しい「専門家」のただの推論を事実であったかのように伝えていた。

冷静を取り戻せたのには二つの原因があった。一つは、スウェーデンのニュースを気にしないようにしていても、日本の新聞はインターネットで読み続けた。特に放射線量の数値の変化に注意を向けた。これで、局所的な放射線量上昇があっても、関東地方全体的には上昇がないと納得できた。もう一つは、スウェーデンにいたからこそ、チェルノブイリの事故による放射能汚染の影響をよく覚えている人が多くいるのである。私は父に相談した。チェルノブイリに重大な事故が起きたことが公開される前にも、風の方向によって、チェルノブイリから流出した放射能汚染の一部がスウェーデンに来てしまった。放射能汚染があったことに気付いたのは、スウェーデンの中部にある原子力発電所の管理者であった。原子力発電所の出入り口で常に行われる放射線量測定によって、所内から出て行く人や車よりも、外から入って来る車などの方が放射線量が多いことがわかったのである。ただし、この放射能汚染がスウェーデンでの生活に大きな影響を及ぼしたかと言うとそうではない。ある湖では魚を釣って食べてはいけなくなった。ある森では茸を採って食べてはいけなくなった。被害はその程度で留まった。広くて人が少ないスウェーデンと、狭くて人口が大変多い日本の経験は同じではないが、スウェーデンの経験から学べるのは、地面に落ちて来た放射能汚染は、それ以上移動しない。その限られた地域における生活習慣を変えなければならない面があっても、ある所に滞在するだけでは、危険な状態はそう簡単に生じないことである。つまり、自分自身の東京での生活が危ないと恐れる必要は、全くないと言ってもいいと、慰めてもらった。3月28日に教育実習を終え、日本行きの飛行機に乗った。振り返ってみると、帰れるかどうかを心配することがあっても、帰るかどうかを迷うことはなかった。

Axel Theorin
(2nd year student, Applied Linguistics, Japanese Language Education Course, Graduate School of Global Studies)

I was glued to the TV and internet on the night of March 11th trawling for news on the disaster. I had planned to return to my country, Sweden, to do my Japanese language practice training two days later. If I couldn't go back as planned, it would be difficult to have a satisfying training and I would have to cut short my visit in 2 years. So I went to the airline company website several times.

I was able to get to Copenhagen and Malmö in Sweden on the 13th with no difficulty. The happiness at coming back after a while surpassed the guilt of escaping from Japan. But even as I was physically safe, I soon realized I was still spiritually hurt by the disaster. For one week, I imagined that Sweden, a country with no earthquakes, was shaking. The country was abounded with news and commentaries on the radiation leakage from the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. Being outside Japan, I became acutely aware of the lack of information disclosure from Tepco and the Japanese Government. With no accurate information from the ground, the Swedish media recycled news from the American and French stations, and reported theories by iffy "experts" as if they were the facts.

Two factors helped to calm down the situation. One was the availability of Japanese news on the Internet. I paid special attention to the changes in the radiation readings and knew that while the levels had gone up in certain areas, the level in the Kanto region remained largely the same. Another reason was that many people still remember the minimal effects the radiation contamination from the Chernobyl accident brought to Sweden. These effects were limited to consumption bans on fish from certain lakes and mushrooms from certain forests. The situation in huge but sparsely populated Sweden is very different from congested and densely populated Japan. I finished my training on Mar 28th and flew back to Japan. In retrospect, I was only worried that I could not come back, and never once doubted that I would.

2011年度　各部門方針
2011 Divisions Policies

国際日本語教育部門「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」ホームページで公開
International Japanese Education Division : "Surveys on Japanese Language Education in Local and Foreign Higher-education Organizations" online

国際日本語教育部門が取りまとめている「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」のデータベースが2011年3月本センターホームページに公開されました。

本調査は、主に本学の交流協定校を対象とし、次のような重点項目に基いて行われています。①学部教育における日本語教育の特徴、②学部教育研究における日本学・日本語学・日本語教育学のカリキュラム及び各分野の連携教育、③大学院教育研究における日本学・日本語学・日本語教育学に関わる研究内容・方向性・研究者・大学院生間の国際的協働ネットワーク、④大学及び大学院教育研究における日本留学の位置づけ、留学先との連携、日本留学のサポート体制、選抜方法、奨学金についての情報等。これらのデータは、各国・地域の高等教育機関における日本学・日本語学・日本語教育学の研究ならびに教育の特徴を知るだけでなく、研究者間、大学院生間の協働的研究、留学生を送る側と受け入れ側の体制作りへの参考資料ともなることと考え、公開に至りました。5月末現在で公開されているデータは、ロンドン大学（SOAS）、フランス国立東洋言語文化大学など15校分ですが、今後も順次公開データを増やしてゆきます。

また、本部門では、2010年度から3カ年プロジェクト「日本語学習者の母語・地域性を踏まえた日本語教育研究－国内外の日本語教育研究機関との協働的研究－」を進めており、昨年度は、英語圏やアラビア語圏を対象とした講演会・ワークショップを行いました。また、これまでのエルカウィーシュ・ハナーン氏（カイロ大学准教授）、秋廣尚恵氏（プロバンス大学）に加えて、今年度はあらたに張麟声氏（大阪府立大学教授）を特任研究員、キャロライン狩野氏（本学客員教授）を連携研究員として迎え、日本語と、英語・フランス語・中国語・アラビア語の対照言語研究とそれらの日本語教育への応用に関する研究活動をさらに充実させます。7月19日には、金谷武洋氏（モントリオール大学）と秋廣尚恵氏（プロバンス大学）による日本語とフランス語の対照研究と日本語教育への応用に関する研究会が予定されています。日本語とフランス語の対照研究と、地域の異なるフランス語学習者への言語教育といった二つの軸からも興味は尽きず、充実した議論になることは間違いないでしょう。　（谷口龍子）

The Division's database "Surveys on Japanese Language Education in Local and Foreign Higher-education Organizations" was made accessible to the public on the Center's website in Mar 2011.

The database is made up of publicly accessible data from fourteen universities such as SOAS, and the Institut National des Langues et Civilizasions Orientales, and will be progressively increased in the future. The Division has also embarked on a 3-year project, "Japanese Language Education Research according to Students' Mother Tongue Language and Regionality - Joint Research with Local and Foreign Japanese Language Education Organizations" and has organized lectures and workshops about the English and Arabic spheres in 2010. We also welcomed new co-researchers and will continue to enrich our research activities on comparative linguistics between Japanese and English, French, Chinese and Arabic, as well as the application of the research to Japanese Language Education. Lectures by Professors Takehiro Kanaya (Montreal University) and Akihiro, who will speak on comparative research between Japanese and French and the application to Japanese Language Education, are scheduled end July.

(Ryuko Taniguchi)

対照日本語部門
Contrastive Japanese Division

対照日本語部門では、次の4つの活動を計画している。

（1）日本語と諸言語との対照言語学研究の文献情報のデータベース構築

昨年度までに、日本語とスペイン語、日本語とポルトガル語との対照研究文献について、国内外の紀要・学会誌等を中心にほぼ調査を終え、リストが完成している。今年度は、この情報をもとに、検索に必要なタグづけなどをしてデータベースを構築し、検索・閲覧・追加などが一元的に行えるようにする。また、2011年度の新たな調査対象として、朝鮮語、中国語、ドイツ語等との対照研究の文献情報を収集する予定である。完成したものから順次、本センターのホームページ上で公開したい。

（2）日本語と諸言語との対照辞典の調査・収集

国内外で刊行されている、日本語と諸言語との対照辞典（中日辞典、韓日辞典等）にどのようなものがあるかを調査し、可能な範囲でそれらを収集する。

The Contrastive Division has planned the following four activities:

(1) Creating a document information database on contrastive research between Japanese and other languages

Research centered mainly on domestic and international bulletins, scholarly journals, etc. that was carried out up to last year for the information database on contrastive research between Japanese and Spanish, and Japanese and Portuguese is almost complete with the list finalized. This year, we are looking at tagging the information necessary for searching to complete the database. We are also planning to gather document information on contrastive research with Korean, Chinese and German.

(2) Research and data collection on bilingual dictionaries for Japanese and other languages

We plan to conduct research on bilingual dictionaries

（3）日本語と諸言語との対照研究についての研究会の開催

昨年度は2回の研究会を行った。本年度は、7月、10月、12月に開催する予定である。それぞれの回で、学外からの講演者1名と本学教員2名が研究発表を行い、それらについて、参加者（教員、学生等）も含めて活発な議論ができるような会にしたい。

（4）海外の日本語研究事情の調査

日本語研究が行われている国外の大学のいくつかを訪問して研究者と面談し、研究動向や実情について意見交換を行なう。また、可能ならば日本語教育事情についても調査する。スペイン、ドイツ、中国などへの訪問を予定している。（早津恵美子）

for Japanese and other languages published in Japan and overseas.

(3) Organize seminars on contrastive research between Japanese and other languages

Seminars are scheduled in July, October and December this year.

(4) Research on Japanese language research overseas

We will visit a few foreign universities where Japanese research is being carried out, and interview the researchers to find out about research trends and the current research situation. We also plan to visit Spain, Germany and China.

(Emiko Hayatsu)

社会言語部門
Sociolinguistics Division

2010年度は専任教員を迎え、本格的に活動を開始した。真田真治氏「台湾『宜蘭クレオール』について」、パトリック・ハインリッヒ氏「言語喪失と言語学の反応－琉球諸島のケース」と2回の講演会を行い、2009年度に実施した講演会ダニエル・ロング氏「小笠原における英語と日本語の言語接触」とあわせて、文字おこしをし、ブックレットにまとめる予定である。社会言語部門での大きな事業の一つである、社会言語学基本文献のデータベース作成については、準備段階としてのデータ収集、入力をほぼ終え、データベースの基本的な設計、方針を決定した。2011年度前半の公開を目指し、作業を進めている。また、本部門での事業の一つとなるフィールドワークを中心とした調査については、昨年度の予備調査の結果、対象を奄美諸島での言語事情調査と決定し、今年度からは本格的な調査を開始する。

これまで開催した講演会は結果的に、小笠原、台湾、沖縄と地理的な意味での日本語のバリエーション、周辺的なものがテーマになっていた。今年度は、日本語の中でのバリエーションをテーマとした講演会を開催することを考えている。また、広く参加者が意見を交換することのできる研究会の開催も計画している。（坂本恵）

In 2010, we welcomed a full-time staff and actively started our activities. We plan to publish a booklet on the lectures by Professor Daniel Long's lecture "Language Contact between Japanese and English in the Ogasawara Islands" held in 2009, Professor Shinji Sanada's "Yilan Creole in Taiwan : A Japanese-lexicon Creole" and Professor Patrick Heinrich's lecture - "Ryukyuan Language Endangerment and the Response of Linguistics" held in 2010. As for the major project of the Division, creating a database of basic sociolinguistic references, we have almost completed the preparatory stage of data collation and entry, and have decided on the basic design of the database and the direction to take. We are working to have it publicly available by the first half of 2011. As for fieldwork-oriented surveys, one of the Division's activities, based on preliminary surveys conducted last academic year, we have decided to conduct surveys on the linguistic circumstances on the Amami Islands and will embark on the actual surveys this academic year.

(Megumi Sakamoto)

比較日本文化＋国際連携推進部門
Comparative Japanese Culture Division and International Cooperation Division

2011年度の比較日本文化部門･国際連携推進部門の方針は次の通りである。

①“日本を学ぶミニ講義”の映像コンテンツの作成と配信（地域社会先端教育センター「最適化プロジェクト」との協働作業、責任者・林佳世子教員）。一昨年度から海外交流協定校の日本語･日本研究の初学者を対象として、“日本を学ぶミニ講義”の映像コンテンツ作成を手掛けてきた。2010年度には「食生活の変容と自給率」(野本)、「神事と芸能」(友常)、今年度は「在日コリアン、在日韓国･朝鮮人、在日朝鮮人―民族（的）集団とその言語の呼称について」（前田）を収録した。今後も継続してほかの先生方の協力をお願いしていく予定であるが、さらにこの成果の海外提携大学での配信、また、海外大学を訪問する教員に訪問先での試験的な放映を依頼し、内容を検証していく。

②今年度より3年間の計画で採択された科研基盤研究（B）「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究」（研究代表・野本京子教員）をはじめとした調査・研究の支援。

③「e-Japanology」プロジェクトの具体化のための基盤整備。

④2010年度には国際共同研究会「牡丹灯籠の旅」、また去る2011年5月16日には「宮澤賢治の作品にみられるキリスト教的表象」を開催してきた。こうした成果の集約もめざしながら、比較日本文化研究のための国際研究会・講演会を開催する。

⑤以上をふまえ、さらに他の部門の活動に協力しながら、「国際日本研究」のアウトラインとネットワーク構築をすすめていきたい。（友常勉）

The AY2011 Joint Divisional Plans for the Comparative Japanese Culture and International Cooperation Divisions are as follows:

1) Creation and distribution of videos on "Mini lectures on Studying Japan" (joint project with the Global Society Advanced Education Center's "Optimization Project", Kayoko Hayashi). Since two years ago, we have started making "Mini lectures on Studying Japan" videos targeting Japanese language and Japanese research students in overseas partnership universities. We recorded "Historical trajectory of eating habits and self-sufficient in food rate of Japan" (Nomoto), and "Shinji to Geino" (Tomotsune) in AY2010, and "Korean residents in Japan - ethnic groups and the linguistic names" (Maeda) in AY2011.

2) Support for surveys and research such as "Binding Japanese - Japanese Society, Nikkei Community, Lifestyle language of "Japanese Language People," a Grant-in-Aid for Scientific Research (B).

3) Basic maintenance work on the "e-Japanology" project.

4) Organize international seminars and lectures on Comparative Japanese Culture research.

5) Making full use of the above to promote joint activities with other divisions, and design the outline and network of "International Japanese Studies."

(Tsutomu Tomotsune)

交流協定校紹介 ⑤　香港中文大学
Introduction of International Partner Universities - The Chinese University of Hong Kong

東京外国語大学と香港中文大学は2001年に交流協定を締結し、この10年間、学生の交換留学を中心に活発な交流を行ってきました。

香港中文大学は1963年に創立された8学部からなる総合大学です。中文大学は4つのカレッジの統合によってできました。今でも学生は入学と同時にいずれかのカレッジに所属することになっていますが、このカレッジ制度は中文大学の特色の1つであり、学部を越えてカレッジごとに行われるさまざまな活動も盛んです。創立以来、伝統と現代性、東洋と西洋の融合を図りつつ、質の高い教育を目指してきました。研究面でも教授陣の業績が評価されており、2009年には元学長・高錕教授が光ファイバーの研究業績によりノーベル物理学賞を受賞しました。吐露ハーバーを望む、自然に恵まれた広大なキャンパスで、1万4,000人以上の学生たちがのびのびと大学生活を楽しんでいます。世界の28の国・地域の200校以上の大学と交流協定を結び、多くの留学生が地元の学生と共に学んでいます。香港の学生の母語は広東語ですが、中文大学では英語、北京語によるコースも多数開講されています。正規の学期はもちろん、夏期集中北京語コースにも世界中から交換留学生が集まってきます。学生たちは寮の活動や講義を通して、多文化・多言語を背景とした環境のもと、異文化理解を深めています。

香港では以前から日本に対する関心が高く、中文大学では1967年に日本語、日本文化、日本社会などのコースが開講されました。そして1991年には、社会のニーズに応えて日本研究学科が誕生し、今年20周年の節目を迎えました。日本研究を専攻する学生は、在学中に全員、日本に1年間の留学をすることになっています。東京外国語大学をはじめ、日本全国のトップレベルの大学で勉強する1年間は、学生たちにとって視野を広げる貴重な経験であり、一生忘れられない思い出となっています。専攻課程では、確かな日本語力を身につけるとともに、人類学、文化史、映画研究、言語学、大衆文化研究など幅広い観点から日本について研究する力を養うことを目的としています。専攻・副専攻課程あわせてのべ約3,000人の学生が日本研究学科開講のコースを履修しています。

2011年3月に東北地方太平洋沖地震が発生し、大きな被害がもたらされたことに、中文大学の教職員、学生全員が心を痛めています。香港各地で支援のための活動が行われていますが、中文大学でも全学に呼びかけて義援金を募り、キャンドルを灯して「祈りの会」が行われました。中文大学からも「日本は必ずこの困難を乗り越える」と信じ、一日も早い復興を祈っています。

（香港中文大学日本研究学科　専任講師　上田早苗）

TUFS and The Chinese University of Hong Kong (CUHK) became partner universities in 2001.

The Chinese University of Hong Kong was established in 1963 and comprises eight faculties. Since its founding, it has strived to conduct high quality education while balancing traditions with modernity, and the east with the west. In 1967, it started courses in Japanese language, Japanese culture, and Japanese society. To meet the needs of the society, the Department of Japanese Studies was established in 1991. This year marks the 20th anniversary of the department. Students in the major program study one year at a Japanese university. The courses hone students' ability to conduct research on Japan from a wide variety of perspectives such as anthropology, cultural history, movie research, linguistics, pop culture studies, etc. About 3,000 students are enrolled in the major and minor programs.

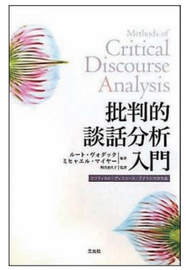
(Sanae Ueda, Department of Japanese Studies, CUHK)

今おもしろい本 ③
Interesting Books I Recently Read: 3

『批判的談話分析入門』（ルート・ヴォダック、ミヒャエル・マイヤー編著　野呂香代子監訳、三元社2010）

“Methods of Critical Analysis”（Luth Wodak & Michael Meyer）の日本語版である。「方法論」(Methods)ではなく「入門」と訳されているように、本書の構成は、批判的談話分析（以下CDAと略す）の歴史、方法論の種類、他分野との関係、CDAに対する捉え方の多様性等、これを一冊読めばCDAの全体像を捕らえることができるという読みやすい入門書となっている。章ごとに訳者が異なるが用語の統一もなされており、CDAを一つのアプローチと定義付けるマイヤーに対し、方法論として捉えるフェアクラフとの相違も明らかである。

CDAの前身であるCL（Critical Linguistics）は、西洋の哲学的伝統や認識論から生まれ1970年代後半から盛んになった。談話分析研究の三次元的枠組みとも言われるCDAの文献は膨大であるが、”critical”というあからさまな表現が日本の土壌になじまないのか、日本語版として出ているものは、『言語とパワー』(フェアクロー、大阪教育図書）ほか僅かである。本書の発刊によって、日本の社会における支配、権力、差別や管理を言語形式や談話構造から読み解くことに楽しみを覚える者が増えることを期待したい。（谷口龍子）



Methods of Critical Discourse Analysis" by Ruth Wodak and Michael Meyer, translated by Kayoko Noro, 2010.

"This is the Japanese version of "Methods of Critical Discourse Analysis" by Luth Wodak & Michael Meyer. As the word "introductory" implies, this book introduces the history of critical discourse analysis (hereinafter, CDA), the different types of methods, relationship with other fields, the diverse ways to understand CDA, etc. and is an easy-to-read introduction to everything one should know about CDA. The precursor of CDA, Critical Linguistics (CL), originated from Western philosophical traditions and epistemology and became popular from the late 1970s. There is already abundant literature on CDA, known as the three-dimensional framework of DA research, but I hope that with this book, more people would enjoy understanding control, power, discrimination and management in the Japanese society from the perspective of linguistic form and discourse framework.

(Ryuko Taniguchi)